

東北タイの開拓空間の形成

(東南アジア研究センター創立20周年記念出版への投稿原稿)

海田 能宏

1. 古代の開拓空間

バンチェングやノンノクターに代表される先史文明にはここで触れないとして、紀元後に限っても、コラート高原は今までに少なくとも3回の開拓の波に洗われたことが明らかになっている。現在は第3の波がまさに終えんしようとしているところである。

第1の波は、遠く3世紀ごろに遡る。メコン河の下流域の扶南に稲作が始まった頃、ほとんど時を同じくしてコラート高原のムーン・チー河の氾濫原に、ある種の稲作文化が栄えたといわれる。最初の開拓者がいどんだ環境は、メコン河下流域のデルタや、チャオブラヤデルタ周縁部の環境に似た、ムーン・チー河の氾濫原で、そこは定期的に氾濫する、灌木まじりの草原であった。十分な金属器を持たない当時の農民が、乏しい農具で開拓できたのは、樹木が繁茂していない環境のみであった。かれらはそこでバラマキの稲を、定期的な氾濫に頼って栽培していた。この時期の稲作地は氾濫原の中に留っていたようである [Van Liere 1973:5, 1980:267-271]。

ムーン・チー河流域の氾濫原に今はまだ素性の不明な古代都邑遺跡が300以上も分布していることが、航空写真の解析によって明らかにされている。[Supajanya et al. 1972]。それらは、氾濫原から、やや標高の高い段丘地形 (terrace) に遷移するあたりに主に分布し、不定形あるいは円形の濠と土塁を持つ集落あるいは小邑の跡であり、それらの小邑は放射状にのびる道路網によって互いに結ばれている。ヴァン・リエ氏によると、ムーン河の支流には、氾濫水をより広い範囲に分散させ、稲作地を広げ、稲作をより安定化させる目的で作られたと思われる、低い土堤と導水路の跡を航空写真から読み取ることができる [Van Liere 1980:270]。これらの古代都邑遺跡の少なくとも一部、ならびに水利遺構はこの時代の稲作文明に関連するものと信じられている。この稲作文明はなにか未だ明かにされていない理由によって、6世紀にはほぼ消滅してしまった。気候、水文環境の大変化がこの地域で生じたことが引き金になったという説も一応考慮されるべきであろう。

この後にコラート高原を覆うのは、アンコールに本拠を置くクメール文明の周縁部として位置づけられる、都市国家群と、それを支えた農業集落群である。最初の開拓者たちと異なり、彼らが開いたのは低位段丘 (low terrace)、あるいは平原に立地する天水田であった。現在のカンボ

ジアの、今はほとんど人跡まれな北アンコール平原の航空写真を見ると、ところどころに方形の濠を持つ都市跡と、小さな池群の跡と、それに水田の区画と判別できそうな畦畔らしい痕跡と、農道跡とおもわれる線を見いだすことができる。東北タイ、とくにムーン河流域とチー河の下流域において、同じく航空写真によって、方形の濠を持つ都市跡と小溜池群を持つ天水田地域を容易に見いだすことができる。集落は溜池の水を頼りに溜池の周辺に塊村状に配置されていたらしい。しっかりした畦畔を持つ小区画の水田は明らかに移植田である。都市跡の分布状況から判断して、最盛期にはこの種の水田群が低位段丘のほとんど全域を覆ったと推定されている。

このクメール文明に裏打ちされた稲作文明も、これまた未だ知られていない理由によって、はやくも13世紀には歴史の舞台から消え失せてしまった。北アンコール地方で生じたとされる、植生の破壊に起因する農地荒廃から類推して、コラート高原においても、段丘地形面の過度の土地利用が全面的な土地の荒廃をもたらし、稲作をさえ消滅に導いたとも言われている。コラート高原は、13世紀から18世紀のなかばまでの長い間、政治的に空白地域であったばかりか、まったくの無人の空間であったように見える [Keyes 1976:47]。

300 を越える古代遺跡の考古学的調査はいまやと始められたところ

である。まず純考古学的な、出土物の美術的様式の同定などが先行しており、当時の環境と農業形態を推定できるようなデータはいまのところ提出されていない [Silpakorn University 1981]。また、これとは別の接近方法として、東北タイに伝えられている民話などを分析して、考古学的調査を裏付けるような、古代の都市とその支配者の名前を同定したり、当時の諸都市間の政治的関係を推定しようとするような研究もある [Keyes 1974]。

11. 近世の開拓空間

18世紀から舞台に登場してくるのはラーオ人であった。18世紀の初め、ヴィエンチャン王朝を追われた仏教僧ブラクルーボンサメート配下の3,000 人の一団が、現在のタイ、ラオス、カンボジアの国境が接するあたりに勢力を扶植しようと、植民したのが始まりであろう [石井 1985:2]。1713年にチャムバサック国王になったチャオソイシーサメート王が一種の屯田兵を四團に派遣して、勢力の一層の伸張と国家の防衛線の強化をはかり始めたのは1718年といわれている。コラート高原には、チャンケオあるいはチャオケオモングコンが手勢3,000 人とともに屯田し、今のローイエット県スワンナブームの近くのバーントーングに前進基地を築いた。これが、ラーオ人によるコラート高原植民のはじまりであった。

18世紀のなかばになるとすでに、チャムバサック国の出先と、ナコー

ンラーチャシーマを前進基地として
コラート高原に勢力を扶植しようと
試みていたアユタヤ王朝との関係が
きわめて微妙になってくる。たとえ
ば、つぎの話が伝えられている。タ
オムートはチャンケオをつぎ、チャ
ムバサック王に任命された第2代の
知事であったが、1763年彼の死とと
もに、ふたりの息子と彼らのおじの
間に跡目相続を巡るお家騒動が生じ
たときに、知事の息子たちはその紛
争の調停をアユタヤの王に依頼した
ため、結局アユタヤ軍の介入を招く
結果となった。以降、この地方はナ
コーンラーチャシーマを通じてアユ
タヤの宗主権のもとに屈することに
なった。ちなみに、この時敗者とな
ったおじは、トンブリ朝のタークシ
ン王によって、1775年初代のローイ
エット知事に任命され、新しい町を
建設することになる〔石井 1985:2-
3〕。

1793年、チャクリ王朝のラーマⅠ
世の許可をえて、ヴィエンチャン王
国の貴族のひとりが大勢の植民者を
ひきいて（徴税ならびに逕役労働の
対象となる成人男性だけで4,000 人
といわれる）、後にカラシンとなる
地方の植民に着手している。この4
年後、先のチャオケオの孫のひと
りを初代知事として、今のコンケン
が創建された。これもラーマⅠ世の
認可を得たものである。かくして、
18世紀末のチー河中流域には、
下からスワンナブーム、ローイエ
ット、カラシン、ならびにコンケン
の、いずれもラーオ人の、4つのム

（地方国）があったことになる〔石
井 1985:3〕。

1826年のタイラーオ戦争による
ヴィエンチャン王国の最終的な滅亡
以来、コラート高原の植民はもっぱ
らバンコク王朝の諮意的な制御下
におかれることになった〔Keyes 1976
:48〕。メコン河の左岸側から多
くのラーオ人がコラート高原に強
制的に移住させられた。そのひとつ
の例として、1836年、メコン河左
岸のカマウンにおける反乱の鎮圧
に伴い、その地方の2,859 人の人
民が強制的に今のマハーサラカム
県カンタラウィチャイに移住させ
られ、この町の基礎を築いたとい
う事例がある。現在のマハーサラ
カムの町の基礎になったのは、そ
れよりもかなり遅く、1865年に、
バンコク王朝のラーマⅣ世の勅
許を得て、ローイエットの副知事
の息子が4,000 人成人男性を含
む総勢9,000 人の人々を伴って
移住して、新しいムアングを築いて
以来のことになる。

18世紀の終わりまでには、コラ
ート高原には15のムアングがあっ
たとされ、19世紀中にその数は著
増し、19世紀末には100 近くに
達していた〔Keyes 1976:51〕。
ムアングの国主はバンコク王朝に
よって任命されたのであるが、彼
ら国主は彼らのムアングの領土
を所有したわけではなく、そこ
に居住する人民に対する支配権
を有したのみであった。すなわ
ち徴税権である。成人男子は人
頭税と逕役労働の対象とされた。
成人男

子はそのムアング特有のいれずみを入れさせられ、彼がたとえ他のムアングに移住したとしても、徴税権は元の国主にあったとされている。

さて、この頃の開拓移住は、文献史料が述べるような、いわば屯田兵制による、組織的な移住によるもののみであったのだろうか。いいかえると、まず政治空間が確立されたうえで、開拓農民はそのムアングの臣民として入植したのであろうか。筆者がチー河中流沿いのドンデーン村およびその周辺の村々で聞き取った情報を総合すると、史料からロイエットやコンケンやマハーサラカムが創建されたとするころには、これら諸<国>の片田舎にもすでに多くの稲作村が形成されていたようであり、それらの村々はごく少数の親族集団をその開拓の父祖として持ついい伝え、あるいは歴史的事実をもっている。また、人頭税が実際にどれほど重いものであったか必ずしも明らかでないが、徴税者である知事が地方の辺境にまで徴税の網を広げ得たか、また小集団の移住状況を正確に把握し得ていたかも、いささか疑問である（注1）。開拓者である小さな集団にとって、一層恐ろしいものは、自然の脅威、森の霊や、諸々の悪霊のたたり、野盗の横行などではあっても、遠くにいる名目的な支配者ではなかったかも知れない。それにしても、そういう少数集団がほとんど気ままに移動、移住できた地域的治安の基盤は何であったのだろうか。

111. ドンデーン村開拓小史（注2）

村人たちから彼らの村の成り立ちの歴史を聞き出すと、上に述べたような、限られた文献史料から得られた開拓史像とはいささか異なる開拓史を構成することができそうである。筆者が2年間にわたって定着調査したコンケン県ドンデーン村およびその周辺の村々で聞き取った資料をもとに、村々の開拓史を再構成してみることにする。

1. 村のはじまり

コンケン、マハーサラカム県でもチー河沿いの村々の歴史は50年から200年の程度である。200年以上の歴史を持つ村々は、一般に比較的平坦な低位段丘あるいはいわゆる平原上の天水田における稲作を基盤とする。100-130年前後の村々は丘陵が氾濫原に落ち込む境目に位置し、水田を氾濫原に拓いている。50年前後の若い村々は丘陵地の中の浅い解析谷の谷地田を稲作基盤として持つが、現在ではむしろキャサバなどの畑作村として生きていっている村々である（注3）。氾濫原を稲作地として使い出すようになってきたのは、100年そこそこといえる。ドンデーン村はそれらの中のごくありふれた村のひとつである。

ドンデーン村の古老達の語る村の始まりはおおよそ次のとおりである。最初の開拓者の一団は東方約100キロほどのロイエット県デーンノムモン村からやって来た小さなグループ

であった。それは妻に先立たれた寡夫と彼の4人の息子達、それにもう4人の縁者達からなる小集団であった。1857年ごろのこととされている。ほどなくやって来た2番目のグループは、50-60 キロ東のマハーサラカム県ジェンノワイ村からの5家族であった。上の2つの元村はいずれも、稲作の本場ともいえる、平原上に位置する大きな村である。3番目のグループは、隣村ともいえる距離から再移住して定着した小集団であった。そのヤング村は、氾濫原の只中に位置し、洪水で流されてしまったという。

彼らはそれぞれ元村の名を冠した3つのクルム（注4）に別れ、おたがいやや離れたノング（後述）を開田した。彼らは、近隣の2、3カ所の集落候補地を転々とした後、ドンデーン（ドンとは小丘、デーンは赤紫色の茎をもつケナフの一種、村名はこの植物名に由来するとともに、最初の開拓者集団の元村の名をとったともいわれる）に居住することになった。この小さい、低い丘は村の北はずれでチー河の氾濫原に続き、チー河まではわずかに3 kmほどである。村の南は低い丘陵地へと続き、その丘陵は南方へ向かって高度を次第に高めていく。すなわち、ドンデーン村は丘陵と氾濫原のちょうど境目に位置している。この河沿いの河谷平野には、チャイヤブームからウボンラーチャタニまで 400 km にわたる大水田地帯がひらけている。先に名前のでたコンケン、マハーサラカム、

カンタラウィチャイ、ローイエット、それにカラシン県の南部などの主な稲作地はいずれもチー河沿いの氾濫原あるいは低位段丘上に位置している。

2. 環境

ドンデーン村の主な農地になっている氾濫原はノングと呼ばれる凹状の地形単位からなっており、そのようなノングが 20 近くも連なっている。最低位部にはかならずノング（自然の沼）があり、境界は古い地形面の侵食し残されたリッジ状の地形か、あるいは比較的新しいサン川（チー河の旧河道とおもわれる）の自然堤防である。低みの、水もちのいい水田になっている部分は、洪水の勢いを反映して、「氾濫原」でありながらも、沖積的というよりも侵食的な地形である。したがって、サン川の自然堤防を除くと、かなり古い、風化の進んだ土壌が多く、肥沃度は一般に低い。このような、ノングの連続体としての氾濫原をもつ特徴的な地形は、少なくともコンケンおよびマハーサラカム県のチー河筋での、ひとつの典型的な水田地帯の地形である。

3. 開墾（その1）

彼らの土地占有の単位はノングであった。かつては、ノングの中央には自然のノング（沼）があり、その周辺も、周囲の次第に高くなってゆく斜面もすべて種々の樹木に覆われていた。クルムあるいは一家族がノングを単位として占有し、徐々に開

田していった。当初、開墾する時には、自分の望む土地区画の外周にそった立木の幹に斧で斜め上から切れこみを入れそこにワラたばを差し入れることによって、まず開墾権を宣言する。これをチャブチョーング（chap chong）という。あるものは、叫び声をあげ、その声が聞こえる範囲を占有できたという笑話のようなこともあったと古老達は言う。

水田にはいまでも相当多くの大小の立木が残されており、開拓空間らしいたたずまいを今に留めている。以前はいかに森と林が圧倒的に優勢な景観であったかは、多くのノングが例えばノングケェー、ノングドゥーン、ノングベンとか、そこに繁茂していた木や草の名前をとった名称で呼ばれていることに象徴されている。この頃必須の農耕の道具は水牛とスキのセット、伐木の道具としてのオノ、ナタ、ノコ、それに運搬具として牛車と天秤（ハーブ）をあげることができる。集落の近辺や水田地帯の真ん中を流れる小川、サン川の岸に桑を植え、小川やノングで魚を獲り、自給自足的な村落経済を発展させて来た。

1916年頃第4のグループがローイエット県コラオロー村から移住して来た。まずあるものが偵察的にやってきて、ある程度の土地をわけてもらうことの話合いが成立した段階で、彼は自分の村から親族を呼びこんだ。したがって、このグループの田はかならずしも一カ所にかたまっ

ていない。さらに、1923年頃にマハーサラカム県ノッカドーク村からの一団が入ってきてしばらく滞留したが、適当な土地を手に入れることができないとわかると、また移っていったという。この頃にはすでに広い土地を占有する余裕はなくなっていたことがわかる。以上の5つのグループはすべてタイ・ラーオ系の人々であった（注5）。

たいした道具もなしに小さな集団が入植し開拓してゆくことのできた環境ではあったが、氾濫原はしばしば洪水に洗われる上に、木々に覆われた農地には虫害、獣害、病害その他開拓者を窮乏のどん底におとしめる天災が充満していたにちがいない。ドンデーン村の古老たちの語るところによると、しばしば洪水のために米は収穫皆無となり、森の産物であるヤマノイモで食いつないだこと、米を乞うためにナコーンラーチャシーマあたりまでも遠出したこと、野良への往復は猿の大群にいたずらされるために少年少女たちにとっては難事であったこと、うっそうと樹木の茂った村の墓地のあたりは夕方になると恐くて近づけず、水牛を追って家路につくときにもそこは遠回りして帰ったことなど、村人の生活は、牧歌的というよりは自然の脅威にさらされた、きびしいものであったと理解したほうがよさそうである。

開拓者の小さな集団は何をよりどころとしてそのような環境に挑んだのであろうか。開村とほとんど同時

に、村には寺が建立されたといわれている。加えて、クルム、のちにはスム（親族集団、後述）を単位として守護霊をまつり、村全体としても「土地の霊（ビーブーター）」をまつる儀礼を行っていた。ビーブーターは米の豊凶や自然災害をつかさどるものとされ、それだけに非常に恐れられ、かつ敬われていた〔林 1984〕。

4. 開墾（その2）

1920年代の後半には、新たな土地を占有できる余地はもはや残されていなかったとはいえ、実際には自己の占有地のうちの条件のいい低みのみが水田として利用されていたにすぎない。ノーングの周辺部、すなわち幾分高みで、水つきの悪い部分はおおむね放牧地として使われていた。それが、1940年代の後半には、現在とほぼ同じく、開田可能な限界地にまで天水田が拓かれつくしてしまった。これには説明が必要である。

太平洋戦争が始まるとすぐ、タイでは綿製品の輸入が途絶え、綿製品の高騰を招いた結果、全国津々浦々にまで棉栽培が行なわれるようになった。当初は棉栽培はなかば焼畑のやりかたで、誰もが使わない、したがって誰の土地でもない丘陵地の疎林が用いられた。ところがちょうどこのころ人頭税にかわる地租がこの村にも適用されるようになった。行政区長（カムナン）が名目的に検分した（ことにした）占有土地区画の面積に応じて税金を郡役所に払うの

と引換えに、ボートーホック（BT6）という様式の検分証明書をもらい、それによってその土地の占有権が認定されることになった（注6）。従来は、チャップチョーングしておけば、実際に利用していない土地でも、村の中のお互いの認めあいによって、占有権は確保されていた。将来開田を予定している占有地で、他人が2、3年の間焼畑的に棉やスイカなどを栽培しようとも、それを許してきたのであるが、地租改定とともにそうはゆかなくなった。自分の水田開拓予定地に他人が棉を栽培し、それが役所に届け出されると、その占有権は畑耕作者に移ってしまうかもしれない。そういう一種の疑心暗鬼が急速な開田、開畑を押しすすめたと理解される。このころには、村内外の農業労働者を雇ってまでして、伐木、開田が行なわれ、ほんの10年ぐらいのうちに水田面積は4割ほども増えた〔Kaïda 1985:32〕。

また、1940年代は移出者をもっとも多く出した時期である。村内の開拓可能地が急速に開墾されたのみならず、多くの村人たちは小さいグループをつくって新天地を求め、開拓に精を出した。ドンデーン村の人々は多く西方のチャイヤブーム県、コンケン県でももっとも西部、さらにウドンタニ県方面へでかけた。この時期東北タイ全域は水田開拓ブームに沸いていた。

開拓がほぼ極限まで進行した1940年代から1950年代にかけて、ドンデ

ーン村では、一種の宗教改革（信仰改革と言ったほうが適切である）が起こった。それは、村外から婚入した若い在俗の宗教家（モータム）のグループによる旧来の「土地の守護霊（ビーブーター）」の追い出しであった。彼らはビーブーターを災害をもたらす悪霊であるとみなし、仏法のもとに村人の信仰体系を一体化しようとして改革運動をおこしたのである。ビーブーターにかわって、「村の社（ラックバーン）」を村全体でまつることになった。また、これにさきだち、1930年代に入ると、クルムあるいはスムの指導者を中心としてまつられ、供養されてきた「守護霊（ビーティアワダー）」信仰が徐々に消滅していった事実をもあげることができる。これに伴って、開村以来もっとも強固な集団単位であったクルムは事実上消滅した。以上を世俗的に解釈すると、2-3 世代を経過して開拓が一段落した段階で、開拓の始祖の権威を継承し、村の土地占有権を支配してきたクルムの長の指導力が弱くなり、それとともに村の民間信仰および世俗的なリーダーシップは、新しい、若い指導者層に移ったとも理解することが可能である【林 1984】。

5. 開墾（その3）

ワタ作が戦後には急速に衰微したあと、水田になりえない丘陵地には、1960年代初頭からケナフの栽培がさかんになり、ケナフはやがて1960年代終わりごろからキャサバに置き換えられていった。先の小川の岸辺に

はクワにかわって、トウガラシといろいろな種類の野菜、果実が集約的に作られるようになって、それらはコンケンやターブラの市場で売られる。水田農耕に必須の水牛に加えて、肉牛と馬の飼育がさかんになり、農業経営も、稲作一辺倒から、このように畑作、野菜作、家畜飼養等多角化されてきた。ドンデーン村は、感じとしてはいまでも水田稲作村ではあるが、経済的には、とくに現金収入の面からは、稲作はすでに野菜作や家畜飼養より下位になっている。

6. 稲作

稲作は現物獲得部門のほとんど唯一の、もっとも重要な生業である。村人たちの一年の生活のリズムは稲作と共にあると言っても過言ではない。水田はことごとく天水田である。したがって、水環境に品種、作期、栽培方法を適応させることが最も重要な農耕の技術である。一般に晩生種（カオヤイ）は水つきのいい低位の、中生種（カオクラング）は中位の、そして早生種（カオバオおよびカオドー）は水条件の不利な高位の水田に植えられる。6月ごろに苗代を準備し、7月以降、雨が十分に降るのを待って、耕起、代掻き、田植えがほとんど同時に行なわれる。耕起と代掻きは水牛により男手がやり、田植えは女手による。コラート高原は一般に砂質の土壤であり、代掻きをしても粒子がすぐに沈降し、苗を挿すのが困難になりやすいので、上の三つの作業がほとんど同時に進められるのである。雨の降り方がきわ

めてきまぐれであることに加えて、このような作業上の制限もあるので、田植え作業時の労働のピークと遊休性とが共にたいへん高くなる。三つの品種群とも感光性品種である。早生、中生、晩生品種はそれぞれ10月はじめ、10月中旬、11月初旬に順に出穂して稔りの季節をむかえる。

ドンデーンの稲作の最大の特徴は、その不安定性にある。最近6年間の稲作は、とりわけ変動が激しかったようにも見受けられるのであるが、1983年の大豊作の生産高を100とすると、1978年は未曾有の大洪水のために4、つづく1979年は大かんばつで11、1980年は再び大洪水で6、1981年は生育後期にかんばつに見舞われて54、1982年は田植え期のかんばつに9月の浸水が加わって19であった。1983年1年の生産量はこの年を含む過去6年間の総生産量の実に50%以上を占めたのである。故水野教授が調査した1960年代前半の米生産量記録をみても似たりよったりである。こんなことで、ドンデーン村の稲作はもっぱら自給米生産を目的とし、集約化技術を一切導入しないで、細々と行なわれている。1年豊作があれば3年間は食いつないでゆけるだけの土地を確保しているといわれているが、村全体として、近年は自給するにもほど遠い。にもかかわらず、稲作と水田所有問題は村人たちの最大関心事である。

7. 土地所有

1 世帯あたりの平均的な所有農地

は水田 15 ライ（1 ライは 0.16 ヘクタール）、畑 6 ライ、菜園 1 ライ程度である。典型的な所有の形態は、ロングの低みに2-3 筆の大区画水田と、ロングの斜面の小区画の水田 20-30筆ほどをもち、斜面のもっとも高位部は陸稲やキャサバの畑か、サン川につづくところでは、川の内側斜面に1 ライ区画程度の菜園がある。多くの世帯は集落の東南方にひろがる丘陵地域に小さなキャサバの畑地をもっている。上に述べたように、水田の所有区画（プレーン）は一般に斜面に沿って細長く、これは洪水、かんばつの危険をいくらかでも回避すべく、水文的環境の異なる田圃を持とうとする知恵に基づく区画割りである。もちろん土地所有の大小はあり、統計的には 0 ライから 60 ライに及ぶが、土地所有や相続は家族周期と関連させて慎重に分析されなくてはその階層分化に関する実相は掴めない。実感から言うと、農地所有の多寡のみにもとづく階層分化はあまり進んでいないようである。

8. 相続慣行

村には、「男は粳米、女は白米」という諺がある。つまり、男性はどこに行っても芽を出す、女性はそうはゆかないというのである。一般的に息子は他出し、独立すること、娘は親元の近くに留ることが期待される。このため、伝統的には、息子には水牛や金銭のような動産を、娘には農地のような不動産を与える相続慣行がある。ドンデーン村生まれの息子と娘をもつ家族の相続事例 7

2 のうちで、娘が息子よりも多くの農地を相続した事例は 35%、娘のみが農地を相続した事例は 43%で、両者の合計は 78%となり、「農地は主として娘に相続される」といえる。息子が妻方の財に依存できる場合には、不動産は娘のみに分割相続され、親の老後の世話をする娘が親の屋敷地、家屋、その他の財をも相続して、他の娘の 2 倍の財を相続するものと考えられている。この慣行は、原則的には妻方居住制と裏腹の関係にある。

9. 「共働・共食」

村の中には、世帯を意味するタイ・ラーオ語のコーブヒエンと、親族を意味するスムという言葉がある。コーブヒエンは、標準タイ語の世帯や家族を意味するクローブクルアにあたるが、厳密には同一家屋に同居する近親からなる世帯を意味する。スムには広狭の二義があって、狭義には、親子、夫婦、きょうだいを中心とする家族を意味し、広義には個人を中心に祖父母、親、子、孫の四、五世代の親族やふたいとこあたりまでの父方母方双方の親族を指している。それはさらに擬制的に拡大しても用いられる。このような親族は、日常相互に互助が期待される間柄であり、「共働・共食」は近親互助規範を象徴的に表現する言葉としてよく使われる〔口羽；武邑 1985〕。

結婚すると、男性はしばらくは妻方の世帯で妻方の家族と同居するという、妻方居住の伝統的な慣行があ

る。結婚後、妻方に居住して、2-3 年または数年の後、夫婦は独立の家屋を建て、自分の世帯を持つようになる。その後も、経済的に独立するまでは、娘夫婦は親の世帯と田畑を共同耕作し、収穫物を共同消費しながら、自らの財力を蓄えてゆく。この期間、親世帯と娘世帯は別居しながらもまるでひとつの世帯であるかのように共同生活を営む。このような共同関係では、農業、とくに水田耕作を中心とする生計の共同が基本的に重要である。水田耕作を中心とするこのような世帯間の共同はドンデーンの近親間共同のひとつの特徴であり、全世帯の 1/3 強がこのような共同にかかわっている。

IV. 東北タイの開拓地性と人の移動

ながながとドンデーン村の開拓史の事例を述べたが、東北タイの開拓地性を述べるのに、この村がひとつの典型的な事例を提供すると思ったからである。本節では、ドンデーン村で見いだした開拓地性を、コラート高原、とくにチー河流域に拡大して検討する。開拓者が移動するには、彼らを旧村が押出す圧力、新村が彼らを受入れる許容性、小集団の移動性を保障する互助的な社会組織、地域的な治安と土地占有ならびに所有に関する慣行および法制という 5 つの条件が満たされなくてはならない。それにもうひとつ加えれば、開拓者精神である。

1. 開拓者精神

まず、開拓者精神について、タイ

・ラーオ族の男たちはもともと移動を好む気持ちを持っていることを指摘できる。かつて、東北タイの男たちは、中部タイのチャオブラヤーデルタへ、コラート高原の原野で育てた水牛を追って売りにゆき、また米の収穫期の季節的労働を求めて出かけていった。若者はある時期、とりわけ目的もなく、わずかな荷物を持って、コラート高原の各地をいわば武者修業にまわる慣行もある。タイ・ラーオ族の古い民話にも、若者が各地を巡礼したり、商人として各地を放浪する物語が多い〔吉川；赤木 1976〕。不作年に米を乞うてまわるときにも、各地の土地事情を調べることができたであろう。レンサーオという言葉は、現代語では女遊びというややふざけた語感があるが、もともとは配偶者を求めて若者が村々をまわる行動をいう言葉である。この地方では男性の婿入り婚が普通であり、しかも結婚相手はほとんど自分でみつけることになっているから、レンサーオする若者は真剣である。実際の婚姻圏は同一村や近隣村にほとんど限られるが、たまに他郡、他県からの婚入があり、また婚出することもあり、若者たちの行動圏と、情報収集圏はかなり広がりうる可能性がある。

後で述べるように、たとえばドンデーン村を出て、コラート高原の西部地方の辺境の開拓地へ行った村人とその行為を、村に残った人たちは、勇気ある人、勇気ある行動と褒めこそすれ、食いはぐれものと軽べつす

ることは決してない。定着稲作民でありながら、タイ・ラーオ族の男子は本来的に、定着的というよりは流動的である。

2. 開拓者集団を村から押出す圧力

人々を村から押出す圧力は、人口増加と稲作の不安定性である。食べてゆけるだけの米の生産量に比較しての人口圧力といったほうがいいかもしれない。メコン河沿いの、雨量に恵まれた河谷平野はまた洪水常習地であり、まともな米の収穫は3年に1度である。ムーン・チー河中下流域の平原上の稲作地域は、降雨に恵まれると大豊作になる半面、ひとたびかんばつに遭うと、広範囲に大被害を受ける。ドンデーン村のように、中流域の氾濫原に水田をもつ地域の米の生産の不安定性については前述したとうりである。何年に一度かは凶作があるというのではなく、何年に一度は豊作に恵まれると表現するほうが正しい。コラート高原の稲作は降雨量からみてマージナルな地域といわざるをえず〔久馬 1973: 519〕、おしなべて米生産の変動係数はモンスーンアジア稲作地のなかでもきわだって大きい〔内田ら 1981: 390-391〕。とくにコラート高原の西部地方は、モンスーンの山陰にあたるレインシャドウ(rain shadow)

となっていることにより、降雨は少なくその時間的場所的変動はとりわけ大きい。図2は、稲作に必要な月間雨量が最低120 mmと仮定したうえで、5年間のうち4年間はその量が確保できる月を図示したものであ

る。コラート高原の西部地域は、満
足に降雨がえられる月は9月だけ
であることがわかる。このような、
いわゆるレインシャドウゾーンは、
コラート高原中西部からカンボジア
平原の大部分を占める広い範囲に
分布している [Kaïda et al. 1984:251]。
。雨の降り方を要約すると、雨季の
始まりが不安定であり、いったん雨
季が始まっても雨季の中休み（ド
ライスペル）があり、それが生起す
る時期と期間は予測しがたい。雨
季の降雨総量は十分である年でも、
降雨は集中し、3日間降雨が雨季
全降雨量の20-30%を、10日間
降雨が50-60%を占めるという
降り方が一般的である。東北タイ
では、雨季の雨の降り方も、ある
地点をとってみると、いわばまぐ
れあたりの降り方なのである [海
田ら 1985]。

1世帯が十分に食べてゆける水田
面積は、年々の収穫が極端に不安
定なドンデーン村では、水野は40
ライと判断し、われわれの観察によ
ると、かなりの農外収入をあてに
できるばあいでは最低限15-20
ライは必要である。これだけの面
積を家族労働のみで経営するとし
て、先に述べた、天候と土壌条件
に左右される田植え労働の非効率
なことを考慮すれば、家族が目い
っぱいに稲作に励んだとしても、
年々の米生産の極めて不安定な
チー河中流域においては、十分
に米を自給でき、いくばくかの余
剰米を生産できた時期は未だな
かったのではないかと推測される。
ここでは、土地、すなわち自給米
生産に対

する人口圧はいとも簡単に高まり
るのである。

3. 開拓の可能性

ゆるい起伏が連続し、あまり濃密
な森林に覆われていないコラート
高原は、小集団による開拓を拒ま
ない。ロングをまず水田として拓
き、そこを拠点としてその周囲に
天水田を広げてゆくのは、ドンデ
ーン村の開拓事例でみたとうり、
生産の不安定性を面積で補うこと
ができるかぎりにはそれほど困難
な過程ではない。これは、平原地
域がもつひとつの特徴とみてよい。
水田地域の立木やアリ塚は徐々に
整理されれば十分なのであって、
現代の水田開拓地域にすら、高谷
ら [1972:83-84] が産米林と表
現したような、一見疎林とみえる
が、その中にアゼをしつらえた拓
きたての水田が存在しているとい
う光景をいたるところに見いだす
ことができる（注7）。

元村の周囲をチャップチョーグ
し、ゆくゆくは派生村を形成して
耕境をひろげてゆくのがもっとも
一般的な開拓方式であることは、
ローイエット県におけるKeyes
[1976:53-54] の記載、南タイ、
ソンクラー県における矢野 [1974]
の記載にみられるとおりである。
ドンデーンを含ま、氾濫原に水田
を拓くためにいくつもの村がほと
んど時期を同じくして形成された
地域においては、しかしながら、
派生村形成による耕境拡大はあ
まり顕著ではない。開拓のごく
初期に未利用地までを含めて、

囲い込みのようなかたちでチャップ
チョーングすることが許されていた
慣行がこれに関連しているのかもしれ
ない（注8）。

派生村をつくりつつ、耕境を徐々に
四囲にひろげてゆくほかに、コラ
ート高原には潮流のごとき民族移動
ともいえそうな、開拓移住の流れが
あった。コラート高原におけるタイ
・ラーオ族は、もっとも早く入植し
た現在のウボンラーチャタニとロー
イエット県を中心にして、そこから
主として西方へ向かって開拓前線を
拡大してきたようにみうけられる。
ドンデーン村もその西遷の波に洗わ
れたひとつの例である。そしてその
波は、勢いが衰えつつあるとはいえ、
現在も続いている（注9）。彼らは、
かつてのドンデーン村の開拓者のグ
ループのように、すべての財産を処
分した上で、近親の小さなグループ
を作って離村、新しい天地を求め、
家族労働力に恵まれれば、旧村で持
っていたよりもずっと広い水田を拓
くことができ、おいおいに生活を安
定させることができる（注10）。

農地としての開拓を許容する土地
は、コラート高原ではかつてはほぼ
無限に存在したといえる。一方、集
落を存立させる大きな制限要因は乾
季の飲料水の確保がむずかしいとい
うことである。ドンデーンの周辺の
30ばかりの村々のうち、どの村も
浅層地下水を汲みあげれば雑用水に
は不自由しないが、その水は塩分を
含むために、5-6ヵ村を除いては飲
用には不適である。ある村は4キロ

も飲料水を運ばなければならない。
古代、中世の都邑遺跡が不定形、円
形、あるいは矩形の水濠を例外なく
もっていたのは、住民の飲料水や家
事雑用水を確保するためであったら
うと考古学者たちは推測しているの
も、現実には上質の用水に不足する程
度からみて、十分にうなずけること
である。以上は高原といわれる地形
区に特徴的なことである。

図3は現代の東北タイの数県にお
ける、水田および畑開墾の推移を示
したものである。1940年代には、ウ
ボンラーチャタニ、ローイエット、
マハーサラカム県のように、コラ
ート高原の核心域ですら、耕地は全可
耕地の60%に満たない程度であり、
コンケン、チャイヤブーム県のように
つい最近までの辺境はそのころに
は20%そこそこ程度が拓かれていた
にすぎない。これらのいずれの県に
おいても、現在では、開拓前線はす
でに消滅しつつあり、いずれにしても
いままでの伸率で開拓が進むと、
来世紀に残される可耕地は皆無であ
る [Van Liere and Kawai 1974]。

現在の開拓前線は3つある。その
1は降雨の不安定なコラート高原西
部におけるロングならびに谷地田の
水田開拓であり、その2は比較的降
雨条件の良い中、東部の丘陵地の天
水田（その多くはいわゆる産米林で
ある）の拡張、そしてその3は中、
西部に多い、丘陵地の畑地開墾であ
る。いずれにしても農地としては、
降雨量とその分布状況、土壌の保水

性、肥沃性、耐侵食性などからみて限界地的なところばかりで、1940年代以降、コラート高原の単位面積あたりの米生産量が停滞し続けているのは、このような生産性の低い水田の割合が増え続けてきたことによる。

コラート高原における開拓の第3の波の最後の大きなうねりは、畑地開拓である。東北部では、ワタに続いたケナフ、さらに1960年代後半からのキャサバの生産の伸びはすさまじいものであった。畑地開拓、とくにキャサバのそれは、従来の東北タイの土地利用の特徴をすっかり変えてしまうものであった。ワタは栽培と収穫の手間を考えると1世帯あたり2-3 ライが限度で、ケナフは除草と刈取り後の仕末（水浸、皮むき作業）のために1世帯あたり4-5 ライが限度である。それにひきかえ、キャサバは粗放栽培の可能な作物であり、機械化栽培が導入されれば、家族労働のみに頼ってさえ、経営規模を数十ライ以上にも広げ得るし、また、価格の安い作物であるゆえに、規模をひろげないかぎり経営的になりたない。かつて、1940年代にはコラート高原の60 %は森林に覆われていたが、1980年代になるとその比率は10 %をきってしまった。この極端に低い森林率は畑地開拓、主としてキャサバ畑の開拓のせいである。キャサバの機械化栽培体系は、丘陵地を丸裸にし、農道や、排水路や、アゼなど、水の流れをチェックする施設を適切に配置する配慮もないままに、激しい侵食を惹起すること

になった。

図4に、1954年と1967年の航空写真を比較して、畑地の開拓の状況を整理した。ゆるく起伏する標高220-240 m 程度までの丘陵地は開かれつくされ、結局はケナフ、続いてキャサバ畑になった。これよりもっと大規模なキャサバ団地の造成はナコンラーチャシーマ、チャイヤブームなどみられる。

4. 開拓移住を支える社会組織と相続慣行

ドンデーン村の事例としてあげた、クルム、スムという親族組織、婿入り婚の風習、娘に不動産、息子に動産を原則とする相続慣行、若い夫婦とその娘の両親の水田経営を中心とする共同の慣行、「男はモミ、女は白米」という諺、とどれをとってみても、東北タイのタイ・ラーオ族の間では一般的なことがらである。家族・親族組織ならびに相続慣行などは開拓移住を前提としたというか、開拓移住を容易ならしめる、ひとつのシステムを構成しているとみることができる。若い男子は村を出て、他郷（とは限らないが）において、妻の家族を扶けて、優秀な労働力として開拓の中心的働き手となることを期待され、親は若い世代の生活が確立されるまでを保障し、親族グループは成員の安全保障機関として機能する。どれが欠けても開拓地村落における生活の不安定性を克服することはできないであろう。

5. 土地の占有と所有に関する慣行
19世紀初頭まではチャムバサック王朝により、以降はバンコク王朝によってつくりだされた、コラート高原のくくに>は、その知事が人民を支配することになってはいたが、それは領域支配ではなかった。土地は、すべてバンコクの王の所有するものとされていた。ただ、農民は、使われていない土地は誰の土地でもない、つまり無主の土地であるとみなしていた。ここに発生した慣行が、チャップチョーングであり、その権利調整は初期にはスム、クルムの内部で行なわれたであろうし、下っては村長（ブーヤイバーン）、行政区長（カムナン）に託されてきたにちがいない。コラート高原の、少なくともコンケン地方には、1930年代後半以降、国の土地政策に基づく地租徴収ならびに土地占有権確認に関する各種法規が適用されることになったが、それらが、農民によるチャップチョーングの勢いを制限したという形跡はない。さきに述べたように、ドンデーン村では、むしろそれを契機として開拓と移住が一層助長されてきたし、コラート高原全域にわたっても、1940年代以降の急速な開拓面積の伸びを示す統計数値がなによりもよくそれを表わしている。

戦後の畑地開拓は、国道網の整備によって、コラート高原の辺境にいたるまでバンコクの市場圏に入り、畑作物が換金作物になりえたことによって促進された。農村開発促進計画（Accelerated Rural Developmen

t Project）やその他の政府主導型の開拓入植プロジェクトのはたした役割も無視できない。しかしながら、開拓の前線においては、個々の農民の自主的、積極的なチャップチョーングこそが開拓のほとんど唯一の原動力であった。

6. 政治空間と治安

19世紀のほぼ100年間で、コラート高原のくくに>の数が15から100ほどに増えたことはさきに述べた。くくに>の創設と開拓のフロンティアの伸びとがどの程度に関連しあっていたのかという研究はない。くくに>が農民にたいして、いかにどの治安維持と保護の恩恵を与えることができたかということもわからない。開拓前線の伸びと治安状況は密に関係しているようにも想像できるのであるが、データをもってそれを示すことのできる研究はない。一方では、現在のコラート高原の村々の生活状況から臆測をたくましくすれば、野盗、強盗、もの盗りや、村と村の間の衝突など、物理的な危険には、スム、クルム、ムーバンという伝統的、自生的組織の自警機能でもってたちむかえたし、またたちむかってゆかざるをえなかったのではないかとも思う。以上は、開拓史研究のひとつの重要なテーマになりうるであろう。

あとがき

コラート高原に展開した3回にわたる開拓の波について述べ、とくに第3の波については、ドンデーン村

において筆者が参与観察したデータを下敷にして、開拓と人の移動に関する環境、条件、親族・社会組織などにも言及した。コラート高原はある核心域を中心にして、じわじわと耕境を拡大したのではなく、いわば草原に飛び火するように開拓前線がひろがっていったことを述べた。ここには、それを可能にする平原性という地形条件が存在し、かつかつの限界地的稲作ながら天水稲作を可能にする気象条件があり、またその不安定な稲作のゆえに人々は更なる耕境を拡大する必要に常にさらされており、故郷をはなれて開拓地に積極的に飛び込んでゆく気性と家族・親族組織を継承してきた。東北タイの農業システムは何かと一言でいえば、それは「開拓地性」である。

本論では、現代的な問題となっているふたつのことにまったく言及しなかった。ひとつは、ひゆ的にいえば、第4の開拓の波ともいえる、コラート高原から都市への人口移動である。コンケンやコラート、ウドンタニのような域内諸都市も発展しつつはあるが、人口移動の大きな方向はバンコクへ向かっている。現代東北タイの農民の移動性は、バンコクをこえて、はるか中近東アラブ諸国への出稼ぎをも日常茶飯のこととしてしまった。この問題については、すでに多くの研究があるが、いずれ筆者も自分の観察をまとめたいと思っている。

ふたつめは、農地開拓のもたらす

環境破壊と、その農業生産のさらなる不安定化に及ぼす影響、ならびにそれへの現代的な対応策の問題である。筆者は、コラート高原の農地荒廃の方向を修正する唯一の「保護策としてのメコン河水資源開発計画」を環境科学的かつ工学的な立場から論じたことがある〔海田 1981〕。

脚 注

（注1）多くの場合年間2 1/2 から8 バートおよび（あるいは？）年間2 1/2 キログラムの米税程度の額であつたらしい。遙役労働の日数や内容に関するデータは筆者は持っていない。また、1836年にメコン河左岸のカムクート地方から強制的に移住させられた一団は、1845年には、元の領主を長として、ターコンヤングというくまちを形成した。このとき、成人男子407人（総勢は1836年には2,859人であった）からなるこの集団に、バンコク王朝が課した年間の税額は、天然のカルダモン樹脂40ハーブ（60キログラム、あるいは600キログラム？）であった〔Keyes 1976:48〕。人頭税に相当するものは、この例のように、自然の森の産物の採集品などである場合が多い。

（注2）本節は海田、口羽〔1985〕の要約である。

（注3）高谷・友杉〔1972〕は東北タイの水田を、平原、丘陵、平原と丘陵の漸移域、および閉塞低地に立

地する4類型の水田地域に分類している。本論の主たる対象地域になっているチー河流域をとれば、ローイエット、マハーサラカム東部、およびカラシン南部は平原型、マハーサラカム西部とコンケン中東部は遷移地域型、コンケン西部、チャイヤブームならびにウドンタニ西部は丘陵地型に相当する(図1参照)。高谷・友杉によると、平原型は天水稲作、丘陵型は谷地田のかんがい田と山腹の産米林に大別できる。

(注4) 単語の意味としては単に「あつまり」であったり、ある場合には「集落」であるが、この場合は、「親族を基盤とした同郷集団」と解するのが正しいであろう。

(注5) 現在でも、シーサケット、スリン、ブリラムなどのコラート高原南部諸県を中心にして、かなりの数のカンボジア系民族が居住している。チー河流域でもスエイと呼ばれるカンボジア系民族がラーオ系開拓農民にまじってある時期に開拓前線に参加していたことが、農民の口から語られている。現在では、スエイといえばタイ・ラーオ人は一段程度の低い民族として見下しているようであるが、ドンデーン村でも、その隣村においても、そのスエイを彼らタイ・ラーオ人の社会に取り込み同化していった歴史を持っている。ドンデーン村のすぐ近くには、クメール様式の塔をもつ廃寺があり、近隣の村々共通の聖地となっている。このようなことからして、近世におけ

るコラート高原の開拓はタイ・ラーオ人のひとり天下であったとは、いちがいに言えないようである。

(注6) ドンデーン村では、土地の占有・所有関係を示すのに5種の言葉を使い分ける。チャップチョーングとは村人相互の間の土地占有権の認め合いである。単に「開墾する」という意味にもつかわれる。一般的には、その土地を2-3年間は連続して耕作しているという実績がチャップチョーングの条件であるが、実際には耕作地を含む、その周辺のかなりの広範囲の未利用地をもいわば囲い込んで、占有することができた。ボートーホック(BT6)は、村長の名目的な検分に基づき、占有面積に応じた地租を払う際に郡役所から公布される土地検分書であるが、これによって慣習的な占有権が非公式ながら郡役所に認められた形になった。ドンデーン村には1939年ごろ導入された。ソーコーヌング(SK1)は極めて不完全ながら、一応の土地占有確認証であり、ドンデーン村には1949年ごろ導入された。ノーソーサム(NS3)は法律的には、単なる土地利用済確認証書であるが、ドンデーン村には1960年代以来適用されており[水野 1965:15-16]、現在村人たちがいう自己の所有面積もこの証書に記載された面積によっており、土地の相続や売買の基本証書であるばかりでなく、銀行からの借金の抵当としても使える。村人は、実質的な土地所有権利書だと理解している。チャノートは正式な地上測量に基づ

き、境界標を打ちこんだうえで交付されるもっとも最近の土地所有権利書である。ドンデーン村では、現在宅地のみにチャノートが交付されている。

なお、タイ国の土地法は1901年に公布されたのであるが、少なくともドンデーン村に関するかぎり、1939年ごろまではその影響は全く及んでいない。北原〔1976〕が分析した、中部タイにおける土地法の整備状況と比較すると、東北部における土地政策のたちおくれが目立つようである。

（注7）産米林の拡大は1950年代から60年代にかけて最高潮に達し、その時期の東北部の水田面積拡張は年5%もの勢いを示した。産米林は図2の、2-3ヵ月間以上最低限の月間降雨量を保障される、中、東部を中心にひろがった。スキを水牛に引かせる以外、すべて人力作業でこと足る稲作においては、立木はたいした障害物ではなく、今なお、産米林は徐々に立木を払いつつ、熟田化への行程をたどっている。

（注8）村の北に広がる氾濫原の水田地帯では、ドンデーンと隣村であるドンノイ、ドンハン両村の農地が一見錯綜しているように見える。しかし、ドンノイとドンハンの一部はドンデーンから派生したという歴史的事実を考慮し、また近隣諸村の農地所有状況を調べた結果からいうと、村々の集落が塊村をなしてはっきりしたまとまりを持っているように、

村々の所有農地も、境界が明示されているわけではないが、ひとつのまとまりを持つことがわかった。

（注9）水野がこの村を調査した1964年の村の人口は810人であり、それが1980年には900人であった。今、人口の移動が全くなく、在村人口が1974-76年人口変動調査による東北部の自然人口増加率である3.38%で増加したと仮定すると、1981年の村人口は、1379人となるはずで、同年の実際の数より478人多い。これだけの数の村人がなんらかの形で移出したことになる。また、1981年にドンデーン村に在村していた176人の世帯主は641人の生存している子供をもち、その内の190人は離村していた。190人の内で既婚者は126人いたが、その30%は、ウドンタニ、チャイヤブム、ルーイなどコラート高原西部の新しい開拓地の多い県に居住し、農業に従事している〔福井 1985〕。

（注10）林は、ドンデーン村を出て、ウドンタニ県に開拓入植した人たちを追跡調査し、彼らがそこで、かつてドンデーン村に入植した父祖たちがしたであろう生活を再現しつつ、一般的には元村にいたときよりも広い農地を拓き、より安定した生活を確立していることを実証している〔林 1985〕。

引用文献

- 福井捷朗．1985．「東北タイ・ドンデーン村：全体像構築の試み」『東南アジア研究』23(3)．
- 林行夫．1984．「モータムと「呪術的仏教」－東北タイ・ドンデーン村におけるクン・プラタム信仰を中心に－」『アジア経済』25(10):77-98．東京：アジア経済研究所．
- 林行夫．1985．「東北タイ・ドンデーン村：開拓村（ウドンタニ県北モー村）訪問記」『東南アジア研究』23(3)．
- Ishii, Yoneo. 1985. 1(1) A Historical Review. In The Second Interim Report, A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand. edited by Fukui, Hayao, et. al. pp.1-4. Kyoto: CSEAS.
- 海田能宏．1980．「メコンをデザインする」『自然とむすぶ文化』（松田松二編著）所収．pp.358-387．東京：共立出版．
- Kaida, Yoshihiro; and Surarerks Vanpen. 1984. Climate and Agricultural Land Use in Thailand. In Climate and Agricultural Land Use in Monsoon Asia, edited by M. M. Yoshinno. pp.231-254. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 海田能宏；口羽益生．1985．「東北タイ・ドンデーン村：村のたたずまい」『東南アジア研究』23(3)．
- 海田能宏；星川和俊；河野泰之．1985．「東北タイ・ドンデーン村：稲作の不安定性」『東南アジア研究』23(3)．
- Kaida, Yoshihiro. 1985. 2(1) Short Historical Review (of Don Daeng Village). In The Second Interim Report, A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand. edited by Fukui, Hayao, et. al. pp.30-43. Kyoto: CSEAS.
- Keyes Charles F. 1974. A Note on the Ancient Towns and Cities of Northeastern Thailand. 『東南アジア研究』 Southeast Asian Studies, 11(4):497-506.
- Keyes, Charles F. 1976. In Search of Land: Village Formation in the Central Chi River Valley, Northeastern Thailand. In Contributions to Asian Studies, Vol. 9, Population, Land and Structural Change in Sri Lanka and Thailand. pp.45-63. edited by E.J.Brill, Leiden:The Netherlands.
- 北原 淳．1976．「タイの地租改正について」『東南アジア研究』14(1):49-70．

- 小林和正. 1981. 「タイ国人口増加の地域構造: 1960-1970 年」『東南アジア研究』19(1):19-53.
- Kyuma, Kazutake. 1972. Numerical Classification of the Climate of South and Southeast Asia. 『東南アジア研究』9(4):502-521.
- Maekawa, Toshikiyo; and Koike, Satoshi. 1985. 2(3) Neighboring Villages (of Don Daeng). In The Second Interim Report, A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand. edited by Fukui, Hayao et.al. pp. 55-70. Kyoto: CSEAS.
- Mekong Secretariat. 1973. Archaeology and the Mekong Project. Mekong Secretariat, WRD/MKG/INF/L.574, Bangkok: Mekong Secretariat.
- 水野浩一. 1965. 「東北タイの米作農村における農地所有と家族の諸形態」『東南アジア研究』3(2):7-35.
- 水野浩一. 1981. 『タイ農村の社会組織』東京: 創文社.
- Silpakorn University, Department of Anthropology. 1981. Archaeological Study of the Lower Mun-Chi Basin. Bangkok: Mekong Secretariat.
- Supajanya Thiva; and Vallibhotama, Srisakra. 1972. The need for an Inventory of Ancient Sites to Anthropological Research in Northeastern Thailand. 『東南アジア研究』Southeast Asian Studies, 10(2):284-297.
- 高谷好一; 友杉孝. 1972. 「東北タイにおける水田の3類型についてー地形と水田拡張の型ー」『アジア経済』13(9):66-72. 東京: アジア経済研究所.
- 高谷好一; 友杉孝. 1972. 「東北タイの ”丘陵上の水田” – 特に、その ”産米林” の存在について」『東南アジア研究』10(1):77-85.
- 内田晴夫; 小林慎太郎; 丸山利輔; 福井捷朗. 1981. 「タイ国における水稻生産量の変動に關与する自然的要因の分析」『農業土木学会誌』49(5):389-396.
- Van Liere, W.J.; and Kawai, Takashi. 1973. Topography, Population and Actual Agricultural Land Use in the Northeast in relation to its Present and Future Land Capability. Discussion Paper for the Agricultural Working Group of the Development Assistance Group, Khon Kaen, Thailand, 31 October-5 November, 1973. Bangkok: Mekong Secretariat.

Van Liere, W.J. 1980. Traditional Water Management in the Lower Mekong Basin. *World Archaeology* 11(3):265-280.

矢野 暢. 1967. 「南タイの土地所有—タイ・イスラム村落におけるケース・スタディー」『東南アジア研究』4(5):804-833.

矢野 暢. 1974. 「南タイ農村の発展史的把握—派生村形成の社会過程—」『東南アジア研究』12(1):49-65.

吉川利治；赤木攻編訳. 1976. 『タイの昔話』世界民間文芸叢書、第3巻、東京：三弥井書店.

図の説明

図1 コラート高原の水田分布（高谷・友杉[1972]の第1図--1957年の3類型の水田分布（丘陵上の水田と平原上の水田）--に本文で出でくるすべての地名を記入したもの。（省略）

図2 天水稲作が可能な月（1983年のInterim ReportのFig.III-1 Feasibility of Rain-fed rice Farming in Northeast Thailandを若干修正したもの）。

図3 東北タイにおける耕地の急速な拡大（チー川流域の5県について、Van Liere; Kawai, 1973 より作成

したもの）。

図4 ドンデーン村の南にひろがる丘陵地域における林地の消滅と畑地の拡大（1954年と1967年の航空写真により作成。出所は1985年Interim Report, Maekawa & Koike Fig. 2-5aと2-5b）。

